

聞名仏教

第 140 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 5 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp 郵便振替「東本願寺
護持基金」00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

祈り得ぬ心

佐々木蓮磨

明治時代に国木田独歩という有名な文士がおられました。この方は生来至極正

直で自分を偽ることのできぬ純粋な人でありました。その著「偽らざるの記」などは、彼の真面目を物語っております。若い頃から宗教心が厚く、熱心なクリスチャンでありました。そして驚異ということが宗教に入る重要なチャンスであると言っておられました。

ところが、彼は若くして難病にかかり、療養効なく、いよいよ死を覚悟せねばならぬようになりましたところ、非常な不安と恐怖に襲われて煩悶をつづけられたので、看護の人達は心配して、その頃、有名であった植村という牧師さんを招き、死に直面して悩める彼に説教を依頼したのであります。植村牧師は、病苦と死の恐怖に悩める彼に向かっ

て「一心に祈りなさい、必ず神は救うて下さるであらう」と、懇切に説教されたのであります。

してでき難いことであり、理想の世界であって現実にはあり得ないことです。

この点を明確に教えて下されたのが親鸞聖人ではなかったでしょうか。「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮をいだけばなり」とは人間性を正直にアバキ出された言葉であると思えます。これは親鸞聖人のことばであります。そのままだ、また如来のことばでもあります。親鸞は、ただ如来のことばを聞いて行かれたのみでしょう。

この如来の真実のことばによって、自己の真実を知らしめられるところに救いは与えられます。

救われるとは、自分がどうかなることではなく、どうにもならぬ自分の姿——真実の姿を知らせていただく以外にないでしょう。真宗

ところが、苦悶に沈める独歩は、植村牧師の説教を聞いて安心するどころか、かえって苦悶の色を深め、「植村さん！神よ救うて下さい、と祈ることばは易しいが、一心に祈る心の起こらぬのをどうしましょう」と訴えられたと聞いております。この独歩の訴えに対して、植村牧師がどう答えられたかは知るよしもありませんが、おそらくハッキリとした返事はされなかったであろうと思えます。否、できなかつたものと信じます。

ところが、苦悶に沈める独歩は、植村牧師の説教を聞いて安心するどころか、かえって苦悶の色を深め、「植村さん！神よ救うて下さい、と祈ることばは易しいが、一心に祈る心の起こらぬのをどうしましょう」と訴えられたと聞いております。この独歩の訴えに対して、植村牧師がどう答えられたかは知るよしもありませんが、おそらくハッキリとした返事はされなかったであろうと思えます。否、できなかつたものと信じます。

人間の心というものは、つねに変わり通し動き通しであつて真実はありません。一心になるとか、真実になるといふことは、言うべく

の信者が死に直面して「暗い明るいを知る用事がない」と言ったり、「行く先はマツクラヤミだが、ただなんとこの嬉しい」と言ったのは、人間の胸から出たことばとは思われません。如来の真実の智慧から出たことばであります。

独歩は自己をゴマ化し得ぬ正直な人でありましたから、真実のない自分に気づいて嘆かれたのですが、そこには「どうかしたら真実になれる」という予想が動いております。この予想のために苦しまれたものと思えます。真宗の念仏者は、仏智によって人間の甘い予想や理想を打ち砕かれて、真実の姿に立ち帰らせていただくから、一文不知の愚夫愚婦でもスバラしい発言をすることになるのではありますまいか。

植村という牧師さんを招き、死に直面して悩める彼に説教を依頼したのであります。植村牧師は、病苦と死の恐怖に悩める彼に向かっ

人間の心というものは、つねに変わり通し動き通しであつて真実はありません。一心になるとか、真実になるといふことは、言うべく

救われるとは、自分がどうかなることではなく、どうにもならぬ自分の姿——真実の姿を知らせていただく以外にないでしょう。真宗

蓮如上人は「一文不知の愚鈍の身でも、仏の加備力によるがゆえに真実の法を説く」と教えられました。

現代真宗問答

5

(前号からの続き)

A 「寿命無量のアマダ仏と人は撰取不捨の真理という恵みの中にありながら、人はその真理を知らずに、アマダ仏から自分を切り離れた心境で生きていく、というのが迷いの状態といえます。そのような迷い苦しみの状態にいる私たちにたいしてアマダ仏ご自身が、この真理の恵みを知らせ、与えんがためにはたらき続けられておられる。そのはたらきを光明無量といわれ、その光明のはたらきが形をとって言葉となり、私たちに喚びかけ、撰取不捨の真理に喚び覚ませようとはたらいて下さる。その喚び声が南無阿弥陀仏なので、そういうことを今まで申し上げました」

B 「そういうはたらきはどこに説かれているのですか」

A 「佛説無量寿経（以下、大経）にです」

B 「アマダ仏が寿命無量であ

り、光明無量であると言われますがそれは大経ではどのよう

A 「アマダ仏のはたらきの内容を積尊は法蔵菩薩の建てられた願（因）とそれを成就した結果の因果で説かれています。法蔵菩薩の願は四十八通りありますが、その第十二願と第十三願に光寿無量が説かれています。すなわち

十一 たとい我、仏を得んに、光明能く限量ありて、下、百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覚を取らじ。（現代語訳）わたしが仏になるとき、光明に限りがあつて、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません。光明無量の願）

十三 たとい我、仏を得んに、寿命能く限量ありて、下、百千億那由他の劫に至らば、正覚を取らじ。

(現代語訳) わたしが仏にな

るとき、寿命に限りがあつて、はかり知れない遠い未来にでも尽きることがあるようなら、わたしは決してさとりを開きません。寿命無量の願）

法蔵菩薩は永きご修行によつて第十二願である光明無量の願を、そして第十三願である寿命無量の願を成就されました。そこで光明無量・寿命無量（光寿無量）のはたらきがアマダ仏の基本的な徳の内容です」

B 「アマダ仏の因位である法蔵菩薩のご修行によつて光寿無量のアマダ仏になられたのですね」

A 「ええ、経説にはそう説かれています。法蔵菩薩がご修行なされて初めて光寿無量になられたというよりは初めから光寿無量であったアマダ仏の働きを、法蔵菩薩の願行とその成就という経説によつてアマダ仏の働きを積尊が表されたといえるのではないでしょう」

B 「ではアマダ仏は無始無終なのですね」

A 「ええそうお聞きしています。アマダ仏は無限のいのちであり、私たちのいのちは有限です。有限は無限の中です。ですから私たち衆生はアマダ仏の光寿無量の中に生まれてきたといえます。そういう意味では大いなる恵みの領域に生まれたのですね」

B 「私たちは光寿無量の中にありながら、私たちの世界や人生に多くの苦や悪があるのはなぜですか」

A 「それは光寿無量の真理に盲目な迷妄（無明）を因として私たちが身心を形成（人となり）し、しかもその身心を唯一の独立した自己であると深く執着（我執）して邪見をおこし、それによつて様々な業（行為）を為す、そういう迷いの衆生によつてこの世間にはできていますから、五濁悪世であり、それぞれの人の苦の人生があるのです」

B 「無明によつて一人一人が我執を起して罪を造り、罪の世を造って苦しんでいるのですね。苦しみは無明・我執か

ら起こるといことですが、具体的に話して下さい」

A 「そうですね。日常生活ではいろいろな問題に悩みます。ほとんどは煩い悩みや取り越し苦労ですね。生活がやっつけいけるだろうかとか、病気を煩うとか、死んでどうなるかとか、雨漏りとか、パソコンが動かないとか、会計の計算が合わないとか、誰それにああ言われたとか、誰それにととか、小さきまごまごに思いついてはいます。そういう意味では問題や課題が次々と起こるのが凡夫の人生です」

B 「そうですね。毎日片づかない事柄の中で生きています。何も問題が無いという日はありませんし、あつたとしてもしばらくの期間だけで、また問題が起こります。世界でもそうですね。世界が全く平和だと言えような状態はありません。どこかでドンパチをやっています」

A 「そういう問題だらけ、心配だらけの人生をどう生きるかということですか」

B 「だれもがそういう課題を

もっていますが、仏教ではどう説かれているのですか」

A「まず、私が生きているのは、今、此処でしかありません。今此処が生きている（事実）です。過去は過ぎ去って

ありませんし、未来はまだ来てません。未来といつても、今、今と続いていくだけです」

B「そうですね。今、今しか実際の人生はないのですね。にもかかわらず今を離れてあらぬ方向に夢を描き続けてい

ます。若い時は（勉強して技術や語学や教養を身に付けて、海外で働けたらいいだろうな）

などと夢を持ったりしました

が、実際はそういう夢の通りにいきませんね。本当の人生は夢を実現したところのみ

あるのではなく、そういう夢をもって生きて努力している

一日一日の外には無いと思います。そしてまた夢が実現して

海外で活躍しているといつても、実際は決して楽しいばかりではなく、苦しい事や辛い

ことが多いものです」

A「夢は持っているのですが、夢を実現しようと努力しつつ

ある現在、この現在しか実際には実在しません。いつでも

生きているのは今此処です。またたとえ夢が実現した時でも生きているのは今此処です」

B「どんな人生を歩もうとも今此処でしか実人生はないということですね」

A「ええ、そこで仏教はいつでも今此処が（どういう場所）かという、（そこにどうい

のがはたらいっているか）、それを教えているといつてもいい

ですね」

B「今ここはどういう場所ですか」

A「光明無量・寿命無量のはたらきがはたらいっている場所

です。その上と言うか、その中で私たちの（今此処）

です」

B「要するに今此処はアミダ仏がともにまします場所ですね」

A「そうですね。アミダ仏を離れて私そのものも存在し

ませんし、人生ありません。アミダ仏は私ではありません

が、私はアミダ仏と離れて存在しえないのです。光寿無量

のアミダ仏には無上の功德（よき働き）があると釈尊が説いて

下さっています。そういう

う大きな恵みの中に私も置かれており、万人も置かれているのです。」

B「私たちは今此処にすでに大きな恵みの中にあるということですね。ということは、

悩み煩いの問題多き一日一日の、今、今、生きてい

るに大きな恵みが既に与えられてい

るということですね」

A「ええ、そうですね。その功德を今此処で見出し、今此

処に頂き、今此処の生活の中で証しする、それが人生の目的

といえましょう。ですから煩い悩みというものはこの恵

みに気がつかず、自分の煩い悩みの（思い）に苦しめられて

いることが非常に多いということ

です」

B「今此処に与えられている功德を知らず、ただ自分の色々な思い煩い、（あ

あなりたい、こうなりたい、あれもしなければならぬ、これもしな

ければならぬ）と、今ここを離れたいと思

い煩いばかりの処で生きているのが私たちなのですね」

A「ええそういう私たち

のこ

とを煩惱具足の凡夫とい

います。煩惱だらけの人生に何が根本的に欠如しているかとい

えば、今此処にある功德、いわば今此処にはたらい

て下さっている光寿無量のアミダ仏にであうとい

うこと、それが欠けているのです。そのアミ

ダ仏にであう道が仏法なので

す。何度も引用しますが、哲学者の西田幾多郎博士の歌に

我が心 深き底あり 喜も 憂の波も とどかじと思ふ

というのがあります。悲喜苦楽の思いの今此処には底があ

って、どれほど悲喜苦楽の波が騒ごうとも、揺れ動こうと

も、底は動かず離れず私の存在の根柢こんていとなつて私を支えて

下さっている。そういう根柢にであっている歌なのです。

この底こそすでに私とともにましますアミダ仏なのです」

B「今思い出すのですが、よく言われる話に、

（幸福の青い鳥を探しに

あちこちを旅をする。しかし何処にも青い鳥はいないばかりか、

暗い闇の世間の中で悲しいこ

とや苦しい目にあうばかりであつて、どこにも青い鳥はいない。とうとうくたびれて、

やつとの思いで我が家に帰つ

てきたら、自分の家の庭に青い鳥がいた」

という話がありますね」

A「ええ、あれはメーテルリンクの（青い鳥）という話ですね」

B「青い幸福な鳥は外に探す必要はない、今此処にいて鳴

いているのですね」

A「ええその鳴き声が、言つてみれば南無阿弥陀仏のお念

仏の声だといえましょう。南無阿弥陀仏は、今此処にまし

ますアミダ仏を見失つてあらぬ方向に幸せを探して思い煩

っている私たちに、今此処に（あなたと共にいる、あなた

を抱いている、あなたを浄土に連れて行く、あなたの罪を

引き受けている）と喚びかけてましますアミダ仏の声なのです」

B「このお声を聞きつけていくことが大事ですね」

A「ええそうですね」

（了）



信心夜話

江州大浜の吉右衛門の老婆いわく。

この婆々は一生涯信心がえたいえたいと願いましたけれど、信心与える、この婆々は怪我すると思召し、とうとう今日まで信心与えて下さらなんだ。まるきり助けられねば参られぬ婆々であつたと、御助けに逢わせてもらいました。

* * *

この言葉は禿義峰編『安心小話』の中の一節です。

この老婆というのは明治前後の滋賀県の厚信の女性で、吉右衛門さんの奥さんですが、どういってお方であつたか、この一言でよく分かります。生涯一筋に聞法を重ね、そして単に聞法をしたのではなく、どこどこまでも本當のことが知りたい、アマダ仏にであいたい、助かりたいと、いわば本當の

十九歳より満九十歳の夕（ゆふべ）迄常に反覆し給へる経験なり。

信心が得たいという一心で真剣に求め求めた結果のこの一言だといえます。これは信心を求めて求めて、涙の谷を過ぎ、茨の園を歩んで、とうとう三定死に陥つて、絶対無救済のところには、はからずもアマダ仏の大悲にであつた人でありましよう。でないとうこうい言葉はでてきません。

このお話で、真宗の信心は極難信であること、同時に自分が起こす信心ではなくたまわりたる信心であること、この二つがどちらも本當と知らされます。

この言葉に感動した人に、信心の名師といわれた大谷派の今井昇道師の言葉が師の『病中感謝録』に記されています。そのなかの文を引用致します。

「(一)の言や卑近なりと雖もこれ世にありとある中の至高至尊至深至奥至神至妙の実験なり。我開山聖人二

(乃至)予は昨三十七年(明治)の夏、此物語を服部伴蔵氏よりきゝて、玩味すればする程趣味津々たるを覚ゆ。予が多年の経験も実に唯此老女の一言の反覆実験にあるのみ。而も今日に至るも尚容易に味ひ尽す能はざるなり。」と感激でもって述べられています。

なお吉右衛門のこの奥さんと宮川の妙仲と稲葉の妙慰、この三人の女性は一般の平信徒ですが「湖北の三幅対」といわれる程の信心の徹底した念佛者でした。湖北というのは滋賀県の琵琶湖の北部のこと、この地方では知られた妙好人でした。学問沙汰は一切無し、アマダ仏の大慈大悲を实地実験的に知つたお方たちでした。

この言葉ですが「一生涯信心を求めてきたけれど、アマダ仏が信心を与える」と怪我すると思し召して」と

いうことですが、信心を得たいと思つていた私に、もし「これでこそ」というような信心らしきものが自分の心に認めるなら、たちまち「我は得たり」と僥倖になり人を見下し、何か自分が特別な人間になつたように思つて、他者のいうことを素直に聞かず、すぐ人に言い聞かせようとするような、そういう自我が膨張して、邪見僥倖をさらに増長しかねない。それを知つておられるアマダ仏は私に信心を与えられなかつた。いよいよ信心もなく仏法もない、無仏法・無信・外道の私で落ちるよりほか無い私である。ところがはからずも、無仏法のまま、空っぽのまま、「助けられねばならぬ私でありました」と。

(了)

【住職雑感】 ロシアによるウクライナへの侵攻の動画が毎日配信される。見るたびに胸が痛くなる。見ているとおのずからウクライナ側を応援していて、ロシアの戦車が爆弾で破壊される場面などを見ると「やった」と喝采するような気持ちが起こっている自分がある。しかしその戦車に乗っている若いロシア兵にも親があり、兄弟があり、恋人がおり、友がいる。そういう人たちにとっては悲しみであり嘆きである。にも関わらず、見ている私にはそういう相手方の悲しみには心が及んでいない。そんな自分の心がやや恐ろしくなる。戦争は味方にとつても敵にとつても悲劇である。戦闘地域でまさに地獄を経験している民間の老婆が「ウクライナ側になろうとロシア側になろうと、戦争が早く終わって欲しい」と言っていたのは考えさせられる。それと今回の戦争で、イヤというほど知らされたことは、いかに人は情報に左右されやすいかということである。このことをお互い自覚しておくことが必要であろう。またこれで各国が核兵器を持つとするだろう。しかし核兵器をもつた国の権力者がいつも理性的とは限らない。人間は縁が来れば狂気にもなる。そうなる何をすべきか分からない。これが一番恐ろしい。